

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12528

研究課題名(和文) 近世東アジアの地方史誌と中国の地方志編纂の影響 編纂過程を手掛かりに

研究課題名(英文) The Influence of Local Historiography in Early Modern East Asia and the
Compilation of Chinese Local Gazetteer: A Clarification of the Compilation
Process

研究代表者

小二田 章 (KONITA, Akira)

早稲田大学・文学学術院・講師(任期付)

研究者番号：10706659

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：中国の宋代以降における「地方志」の編纂活動の社会的背景を検討するとともに、近世東アジア地域の同様の書物についても考察を行い、「地方志」の他地域への影響関係を検討した。まず、主に清初期の地方志編纂の背景、章学誠の地方志改革の初歩的検討を行った。また、日本・江戸期の「藩史」「国志」検討の初歩として『訓読 豊後国志』の書評を行った。次に、シンポジウム「東アジアの一統志」を主催し、基調報告「東アジアの一統志」を行った。加えて、ミニシンポジウム「一統志研究の現在」にて講演「一統志の時代のあらし」を行って活動成果の浸透に努めた。そして、それらの成果をまとめ、『書物のなかの近世国家』を主編し刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

前研究課題に引き続き、中国地方志の編纂背景を歴史的に位置づけることで、地方志の形式・記載の変化発展の過程と時代性を明らかにした。さらに、地方志そのものが社会そして同時代の他地域に及ぼした影響を考える新たな視座を獲得した。そして、その視点を学界に問い、議論と交流の機会を作るために、シンポジウムを主催し、論考集を刊行した。これらによって、「地方志」という中国史に孤立していた概念を世界史的な視座で考える意義を確立し、また、各地域で孤立していた類似の概念を結びつけて比較する機会を作った。そして、世界に遍在する地方を描く総合的書物「地方史誌」という新たな研究概念を設定し、学問領域の基礎を確立した。

研究成果の概要(英文)： In addition to examining the social background of the compilation activities of the "Local Gazetteer" in China since the Song dynasty, similar books in East Asia in the early modern period were also discussed. Firstly, I examined the background of the compilation of local gazetteers in the early Qing Dynasty, and the initial consideration of Zhang Xuezheng's reform of local gazetteer. We also began to examine the "kokushi" compiled by clans in the Edo period in Japan, and reviewed the Study and Kundoku "Gazetteer of Bungo no kuni Region". Next, the research group I have been organizing, the "Daigen Daimin Kenkyukai", hosted a symposium entitled "Ittoshi in East Asia", in which I made a keynote report entitled "Ittoshi in East Asia". In addition, I gave an lecture, "An Overview of the Age of the Ittoshi," at the mini-symposium, "The Current State of Ittoshi Studies". The results of these activities were compiled and published in a book titled The Early Modern State into the Books.

研究分野：近世中国史、地方史誌研究

キーワード：地方志 編纂過程 社会 中国 東アジア 地方史誌 一統志 杭州

1. 研究開始当初の背景

「地方志」とは、中国王朝期に地方官主導で編まれたある地域の総合的記録であり、特に南宋期以降、沿革・経済・行政・文芸などを一定の形式により描いたものを指す。この「地方志」は、現在も編まれ続けており（新編地方志）中国の伝統的文化・意識を体現する史料のひとつである。また、同様の内容をもつ近世東アジアの書物、「地方史誌」（齊藤博・来新夏編『日中地方史誌の比較研究』、学文社、1995の提起概念による）を、今回の申請では合わせて考える。

「地方志」についての先行研究としては、早くには青山定雄などの研究があるが、「地方志」自体を研究の対象とみなしておらず、そのような研究が近年まで数少ない状態であった。一方、中国では「方志学」という学問分野が存在し、多くの言及が行われてきたが、文献としての特徴に重きが置かれ、成立背景の歴史学的検討はあまり行われていない。1990年代以降の欧米における地域史研究の進展は、地域の歴史意識の表れとして新たな視点をもたらしたが、地域理解を目的とする史料としてのみ地方志を扱うものであり、地方志自体を深く掘り下げた研究はあまり見られなかった。

一方で、近世（各地域毎に差があるが、概ね17世紀以降）東アジアにおいては、「地方志」に類似する形式と内容を持つ書物が刊行されていた。朝鮮の「邑誌」、日本の「藩史」などがそれに該当するが、現時点でそれら史料の相互関係を述べた研究は管見の限り存在しない。

これらの状況と「発想経緯」を踏まえ、本研究は引き続き中国宋代～清代の「地方志」において、編纂過程とその編まれた社会の変化を検討する。そして、その成果を通じ、東アジアの各地域社会に共有される、「地方史誌」を作り出す社会構造と人々の認識の変遷史を描き出すことを目標とする。当面の課題としては、「地方史誌」の編纂過程・史的性質を理解し、「なぜこの時期・社会にて編まれる必要があったのか」という問題意識から社会の状況を明らかにする。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「地方史誌」を作り出す社会構造と人々の認識の変遷史を描き出すことである。中国の「地方志」、そして東アジアの「地方史誌」は、それらが社会経済史などの「史料」としてのみ用いられてきたためか、それ自体の成立と背景から検討した研究は少ない。本研究は「地方史誌」の成立背景を明らかにし、東アジアに共通する「地方史誌」を作り出す社会構造と人々の認識の一端を解明する。

「地方史誌」は、中国の「地方志」のみでも膨大な量を持ち、それら全てを扱う研究は困難である。申請者は中国の杭州、あるいは東アジアのいくつかの地域のサンプルに特化した手法を用いる。サンプルを検討して得られる研究成果は、各時代・各地域における史料制作の過程、歴史認識などに関わるものである。例えば、中国の「地方志」の場合、各時代特有の政治的・社会的需要に基づいて編纂されているため、他の史料では窺えない、各時代の特質を理解する端緒を築くことができる。日本の藩史の場合、江戸初期の「武功」の記録を主目的にした歴史記載が、徐々に藩という領域の地域史的記載に置き換わる過程を検討することで、「藩政」の変容という問題の解明に結び付く。

そして、中国の「地方志」と、近世東アジアの類似の書物（朝鮮の邑誌、日本の藩史など）の関係についても、地域間の書物交流が存在し影響関係が予想されるにも関わらず、明確な議論がこれまで存在していなかった。本研究は、中国の「地方志」を中心に、同時期近世東アジアの「地方史誌」の検討を通じて、これら同様の書物を生み出す社会背景を検討する比較研究の基盤を造るものである。

3. 研究の方法

申請者は宋代以降地方志を数多く編纂した中国・杭州地域を主な研究の場とし、まずその地域の「地方志」の編纂過程を検討する。次に、その成果を近世東アジア「地方史誌」に波及させ、その成立と背景を検討する。そして、「地方志」「地方史誌」両者の比較を通じて、最終目標である「地方史誌がなぜ近世東アジアで作成されたか」の議論の回答を試みる。

使用する史料である「地方志」は、特定の地域に関する政治・経済・人物・文芸などをまとめた書物である。この「地方志」及び東アジアの「地方史誌」について、その編纂過程、及び内容の形式、記載のありかたについて主に比較し検討を行う。

実際の研究遂行においては、近年充実した電子資料を駆使するほか、日本（静嘉堂文庫など）・中国（国家図書館、天一閣など）・台湾（中央研究院など）・欧米（ハーバード燕京研究所など）の図書館など地方志・地方史誌を収蔵している研究機関に赴き、実物を調査し、書誌学的な考察を併せて行う。これは、世界各地に地方志・地方史誌が収蔵されていることに加え、その書誌学的状態の理解が、編纂過程・流伝過程の重要な鍵となるためである。また、訪問前に、日本国内の図書館・所蔵先にて、それら地方史誌を検討し、比較の土台を形成する。

さらに、報告者は中国地方志を主な研究対象としてきたが、本研究の過程では異った時代・ディシプリンの国内外の学会に積極的に参加し報告を行う。また、自身でそれら異なる地域・時代の研究者を一堂に会した議論機会（シンポジウム、論文集など）を主催し、研究接続と議論の浸

透を図る。

4. 研究成果

本研究課題の成果は、いくつかのテーマに分かれる。以下、テーマごとにまとめる。

(1) 「地方志」の編纂過程と個別の背景

まず、前研究計画の発表を修訂して論文化した、南宋期杭州の3つの『臨安志』の編纂過程とその意義づけについて、内『乾道臨安志』と『淳祐臨安志』を例に検討を行い、併せて宋代の「地方志」編纂開始の状況について先行研究を踏まえた考察を行った(後掲論文4)。結果、3つの『臨安志』は全て地方志としての位置づけが異なり、それぞれの時期毎の政治的要請に基づいた形式・記載で書かれていることが明らかになった。なお、それらを踏まえて、南宋期杭州の地方志の「時代性」を問う発表を2020年3月に早稲田大学東洋史懇話会大会にて予定していたが、コロナウィルス感染問題により大会ごと中止になってしまった。加えて、その内容の英語論文化を図ったが、コロナウィルス感染問題とロシア軍のウクライナ侵攻問題により期間中の完成に及ばなかった。

また、清朝初期の杭州の地方志編纂の背景を考え、併せて同時期に杭州の地方政府が編んだ杭州の名勝・西湖を扱った『西湖志』を中心に、清朝の漢族に対する文化統治、及び漢地を中心にした水利統治について検討を行った(論文5・6)。清朝は数量にて勝る漢族を統治するために、明朝が全国に広げた地方志編纂を継続・再編して地方のデータを集積し、また漢族の文化を支配する文化統治を行ったのである。

さらに、宋代杭州の代表的な名地方官である蘇軾について、その治績がいつ杭州にて認知されたか、及び後世の杭州における蘇軾認識の変化について考察した(論文1)。宋代を代表する文人官僚・蘇軾は、杭州を代表する「名地方官」として認識されている。この「名地方官」としての立場がいつ形成されたのか、宋代以降の蘇軾評価・認識と併せて検討した。結果、蘇軾の杭州との結びつきは、清朝の杭州統治に際し、官府が率先して行った蘇軾崇拜の影響が強いことが明らかになった。

加えて、乾隆・嘉慶期の地方志編纂改革の理念的リーダーであった章学誠について、その地方志における女性記載を検討すると併せ、その地方志編纂理念の研究整理と、実際に編んだ地方志の内容整理を行った(発表3)。章学誠は女性の学問を認めない男性主義者の側面が指摘されていたが、彼の行った地方志改革では女性記載をより詳細にかつ事実即して記載する方向性が示され、清朝初期の「貞節」の強調という政府方針に沿った記載であることがうかがえた。

(2) 「一統志の時代」プロジェクト

元～明初期において地方志が全国に浸透したのは、『大元一統志』『大明一統志』のふたつの王朝による総志編纂とその際の地方に対する「材料としての地方志」編纂命令が大きな要因である。そのため、報告者は研究会「『大元一統志』『大明一統志』比較研究会」(略称:大元大明研究会)を組織し、参加した研究者と議論を行って該時期の編纂・記載内容及び史料的問題に関する理解を深めてきた。

その議論の成果を学界に提示し、併せて世界史的な視座に広げていく基礎をつくるために、シンポジウム「東アジアの一統志」を企画・主催(国際研究集会1)し、基調報告を行った(発表2)。基調報告では、元・明・清にて編まれた「一統志」のそれぞれの概要を述べ、以後の議論の前提としたうえで、「一統志」のアジア全域への影響、そして「一統志」を研究することで東アジア近世の新たな側面を見て取れることを述べ、議論の口火とした。

加えて、ミニシンポジウム「一統志研究の現在」にて招待講演「一統志の時代のあらまし」を行って活動成果の浸透に努めた(発表1)。前述の(発表2)基調報告の内容を軸に、「一統志」について知らない初心者に向けて、その重要性を述べるとともに、後の報告者2名(元代福建における全国誌編纂と契丹記載、朝鮮における一統志受容)の議論の前提を予め述べた。

そして、該シンポジウムを起点に、より幅広い議論と成果報告の場として、アジア遊学の特集号『書物のなかの近世国家 東アジア「一統志」の時代』を編集し刊行した(図書1)。本助成の関わったのは、原稿の集積とその整理・校正、さらには(発表2)をもとにした序論の原稿執筆である。

(3) その他(発展的問題など)

地方志のみならず、同様の「地方を描く総合的書物」としての「地方史誌」の比較・研究のはじめとして、日本の近世地方史誌について訳注書(『訓読 豊後国志』思文閣出版、2016)を対象にした書評を発表し、東アジア地方史誌比較の議論の手がかりとした(論文2)。該訳注書は日本近世の地方志から影響を受けた地方史誌を対象にしており、解説や背景整理など、日本史研究者ではない報告者にとっても非常に扱いやすく有用な書籍となっていた。

また、地方志とジェンダーの関係を検討する過程で、ジェンダー史研究の整理をする必要が生じ、小浜正子編『中国ジェンダー史研究入門』の新刊紹介を発表した(論文3)。既に(発表3)でも述べた、清初期ジェンダー変動と男性性の問題に関心があり、また当時参加予定であった明

清史夏合宿 2019 の中国史とジェンダーに関するシンポジウムの予習を兼ねて新刊紹介を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 小二田章 | 4. 巻 10 |
| 2. 論文標題 「知杭州」蘇軾 いつから杭州を代表する名地方官となったのか | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 多元文化 | 6. 最初と最後の頁 28-50 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |
| 1. 著者名 小二田章 | 4. 巻 19号 |
| 2. 論文標題 書評『訓読 豊後国志』思文閣出版、2016 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 埼玉学園大学紀要人間学部篇 | 6. 最初と最後の頁 399-401 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 小二田章 | 4. 巻 986号 |
| 2. 論文標題 新刊紹介「小浜正子編『中国ジェンダー史研究入門』」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 歴史学研究 | 6. 最初と最後の頁 63 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |
| 1. 著者名 小二田章 | 4. 巻 - |
| 2. 論文標題 再論『乾道臨安志』『淳祐臨安志』 對南宋地方志編纂變化的理解 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『首屆中日青年学者宋遼西夏金元史研讨会論文集』 | 6. 最初と最後の頁 200-217 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 小二田 章 | 4. 巻 46 |
| 2. 論文標題 地方志編纂と水利 『西湖志』編纂にみる清朝初期水利政治初探 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『中国水利史研究』 | 6. 最初と最後の頁 19-36 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 小二田 章 | 4. 巻 21 |
| 2. 論文標題 『西湖志』にみる清初期杭州の地方志編纂 清朝の文化統治政策を中心に | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『東洋文化研究』 | 6. 最初と最後の頁 1-25 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 小二田章 |
| 2. 発表標題 「一統志の時代のあらまし：一統志と東アジア社会」 |
| 3. 学会等名 ミニシンポジウム「『一統志』研究の現在」(招待講演) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 小二田章 |
| 2. 発表標題 「東アジアの一統志」 「一統志」という現象を考える」 |
| 3. 学会等名 シンポジウム「東アジアの一統志」(国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Akira, KONITA |
| 2. 発表標題 The Biographies of Women in Local Gazetteers: Focusing on Qing Dynasty Historian, Zhang Xuecheng |
| 3. 学会等名 THE TWENTY-SECOND ASIAN STUDIES CONFERENCE JAPAN (ASCJ2018) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|---------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 小二田章、高井康典行、吉野正史 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 勉誠出版 | 5. 総ページ数 288 |
| 3. 書名 書物のなかの近世国家 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

| | |
|----------------------------|--------------------|
| 国際研究集会 シンポジウム「東アジアの一統志」 | 開催年 2019年～2019年 |
|----------------------------|--------------------|

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|